

くことは、いひなれたる枕詞の字をもて、やがてその地名の字となせる物なり、そはかのあをによし、おしてゐなどいふ枕詞を、やがて奈良難波の事にしていへると、心ばへ相似たり、かゝれば春日のかすが、飛鳥の明日香といふは、その地名の字のうちまかせたる訓を、枕詞になせるにはあらざれば、ひのものとのやまとも、然にはあらず、又これは枕詞のひのもとてふ字をもて、國名の夜麻登の字として、日本とかくにもあらざれば、かの二つの例にもあらず、たゞ日の本つ國たる倭といふ意にぞ有ける、それにとりて此枕詞、もしいと古くより有しことなれば、孝德天皇も、日本といふ名は、これをおもほしてや建たまひけむ、されどかの不盡山の歌は、いとしも古からず、それよりあなたには見えざれば、こは日本といふ號のこゝろをおもひて、後にいひそめつるにあらむか、その本末はわきまへがたくなる。

〔萬葉集雜歌〕詠不盡山歌一首

奈麻余美乃甲斐乃國打緣流駿河能國與己知其智乃國之三中從出立有不盡能高嶺者○中日本
之山跡國乃鎮十方座神可聞○下略

〔續日本後紀十九明〕嘉祥二年三月庚辰興福寺大法師等爲奉賀天皇寶算滿于四十○中副之長歌奉

獻其長歌詞曰日本乃野馬臺能國下略

〔十六夜日記〕さらにおもひつゝくれば、やまとたの道は、たゞまことすくなく、あだなるすさみばかりとおもふ人もやあらん。ひのものとの國に、あまのいはとひらけし時、よもの神たちのかぐらのことばをはじめて、世をおさめ物をやはらぐるなかだちとなりにけるとぞ。

〔續古今和歌集十編〕旅もろこしに渡りて侍りける時、秋の風身に玄みける夕、日本にのこりとまれりける母の事など思ひてよめる。

唐土の梢もさびし日の本のは、その紅葉散りやしぬらむ

權僧正榮西